の秋、瀧川に遊びて、驚きしが、今復この景に驚きぬとて、茶も飲まで立去りて、ステーションに至れは、恰も滊車の來りし時に遇ひ、直ちに乘り、車箱を見るに、憲兵一人あり、下る時に見れば、一人の賊をつれて居たり。哀はれに思ひて、

喘ぎゆく牛を尋ねし人もまたこの盜人をみる心ある

と口占めは、彌次北八の歌とをては、上出來ありとて、人皆笑ふ、銀坐に至りて、夕食を喫し、學舍に歸りつきしは、九時あり、後の學びの爲めにもとて、審に記しゝも、思へは物狂はをさ限あり。

隙ゆく月日の脚はやみ、きのふのやうに思へども、この記をかきしろの時を、數ふれば、はや十二年前のむかしあり。今日にあれば、時勢もうつれば、議論にもろはる所おきにあらず、はかあき一篇の記文も、殆と一身の沿革史とはなりぬ。されど、十年へても、百年たちても、かはらざるものは、只々一片腦中の和魂といふ一塊物のみ。

（完）

五家庄途の記（承前）

不老庵主人

鄙育ちの我等にさへ、千辛萬苦ある此山奥に、都上臈の御下向、御難儀は如何ばかりなりけむ。さても、御入山當時、何を食物に御命は維がれけむ。と申せば、ろも此五家莊といふは、一種の奇地あり。此堺を出づれば、絶えて見ぬ草木あり。例へば草にては『ケドコ』、『セダラ』、『カナヅチ』、『カンネ』、葛根等其他栗實樫實等は固より多く、此等は何れも食にあるもの故、差當りての食は、此等よりやありけむ。今も饑饉の時、貧民は此等をもて一食を濟ます故、乞食といふもの絶えてなし。夏は筍をも食ど

す。又藥種も產す。『ヤツブクリヨウ』、『ドサイシン』、山芎藭等重なるものあり。農產物は粟、稗、大豆を主物にて、蕎麥、玉蜀麥、京菜、鷹菜、『フダンサウ』も乏しからず。唐菜は寒中も絶えず。其他は出來すとぞ。さて米は如何にと申せば、一學氏打えこついふ。米に至りては、潛匿以來一度も試こしものなかりしを、われ思ふは、水なくば如何はせむ。水は到る處混々たるに、水田を作らぬころ可惜しけれ。と明治十年始めて一畝半試作ゑたるに、案外の好結果なれば、ろれより段々開墾して、水を引き、六畝半まで開き、モチ、ナカテなどを作るに、別に肥料をも施さぬに、十年の平均一畝につき二斗に當れり、といと嬉し氣なり。猶水田に就ては擴張の計畫ありと聞けば、五家人の膳上に目の光る如き白米供せらるゝあとも遠からざるべく、砂利色の稗飯、黃金色の粟飯、さては山吹色の玉蜀麥飯も跡を絶ちて、五家の名物もなくなることならむ。

五家は固より田舍なり、其田舍の程を見物のわるなれば、萬事不便は覺悟の事、毛布一枚よ夜を明かし、生味噌を三度の惣菜と定めては、昔の長鋏が恨など毛頭なかりしに、晩食の下飯よは鮮魚の羹を据へあり。物の感じは意外なる程强く、思ひかけぬ響應は腹の底まで甘きに、ろも此魚を何とか申す、と問へば『エノハ』といふとなん。形鮎に似て稍圓く、肉軟かにて味美なり。成長の後は尺餘に上るものあり。此魚潔癖あり。水至つて清からざれば棲まず。故に谿川にのみ立ちて、中流以下には絶えて居らずとぞ。今日一學氏の舍弟某氏手ろら釣して獲られしを、やがて我に饗せられしなり。

食を終りて、獨りツクネンと座敷に端坐せしが、原來無聊に堪忍なき我なれば、家人木挽一全晩食終りて後は、我も爐邊に加はりて快談し、書生風、縣官風、或は造酒檢査官の風して來りし詐欺師等の話、さては其結果とゑて、眞正の檢査官は甚しき冷遇を受けて、其後は檢査もなきことなど、面白く

聽き、さて後近き頃の獲物なり、とて示さるゝ、珍しき斑紋ある鹿皮を拜見し、十時頃蓐に就くに、蒲團豐かにて持參の毛布も要なく、家外の寒心なるに、奥の間より漏るゝ三絃の爪音、さすがに俗ならず。何處か興やら、紛々擾々と騷ぎ立つる絃聲をば、蛇蝎よりもいやがる性なれど、寂々たる山家の夜の忍び音は、譏々たる松の嵐に通ひて心すゞしく、天樂のやうな響に睡氣つきて、フラリ〳〵と快き夢にぞ入りける。

四月四日　快晴今日の路も案内なくては叶はぬ處と聞くに、村の者共さはる事ありとて、行かんといふものなく、打困じたるに、一學氏の息男なる人、自ら嚮導せんといふ。望みても得がたき好侶伴と、嬉しく、結束手早に濟まし、これはいらぬといはるゝ、印ばかりの謝儀を差出し、怪しからぬ御世話にありし禮、慇懃にのべて、午前七時頃いでたつ。

もと來し道を少し引き返して、きのふの吊橋を渡る。聞けば五家にて最も危かりし吊橋は、十數年までは存せし久連子の入口のよて、これは眼鏡の如く反りて、上り口は匍ふ程急に、下りは踏こ滑らし易く、轉び落ちて命を失ふもの多かりしかば、板橋に改造せしよし。この椎原のも、近來縣會の議に付して、牢固なる石橋となす計畫ある由なれば、五家の名物も愈なくなることゝ見ゆ。

さて行くに、けふの路は昨日に比して甚宜しく、剩へ道連は珍しきに、何の苦もなく足は進む。其代り山容水態敢て非凡と賞すべき程の處もなし。差引き嚮導の話に奇聞を耳にし、退屈せぬたけが結構にて、一里半許も來たる處にて、緒方氏の親戚なる人の家に憩ふ。こゝにて薑漬を下物に稗酒の饗あり。われ此度出發の始より、稗酒よ就ては、機會もあらば一杯、との意なきに非しが、けふ圖らず所望を果しぬ。稍大なる茶碗にて二杯まで盡す。審査官が上戸ならば、何と云ふらむ。われら下戸には、

やゝ甘味ありて憎からず。但しアルコホルの量は慥に多し。暫し憩ひて出で立つ頃は、目の内何となくちらつき始めしが、ろれより上り下りの坂路を谿川傳ひに三四町上る内に、フラリ〳〵と樂境に入り、次第に山路の危きを忘れ、風に御し、虚を躡みて、依る所なく、其後暫くは、飄々搖々として行きける、アルコホルの靈驗は揭焉なものなり。

微醺醒め來りて脚下を瞰れば、瀧々たる水の流れ、碪砧たる巖のたゝずまひ、おのづから凡ならざるに、遠く望めば、今を盛の山櫻、白雲の如く、萬疊の翠を點ぜて、自ら醉後の眼を明かにす。(此年は季節一体に早く、熊本の花は三月二十四五日を盛にして、とく散りしを、此地は今盛なり。氣候の後れたるをしるべし)愈行くに路の左りに泉あり。五家第一の水と聞きつ、熱さは熱し、掬ひて飲む。こゝより少し上れば、望こやゝ開けて、栴檀轟の瀑布右に見ゆ。水勢稍大よして高さ二十餘丈もあらむか、下部は樹繁りて見へず。惜むべし。瀑布はいつ見ても目さむるものなり。これより側崖をやゝ行けば、徑澗底に入りて窈窕深遽、嵐氣肌に沉む。之を傳ふて上ること里餘にして、佐々の越とかやいふ處を登る。登り詰むれば眼界ぱとに開く。惚して五家は層巒十重はたえに圍ひて、其間を經通すれば、廣き天を見る處少なし。こゝにて久しぶりに天地の廣きを見て、心もまた廣し。時に十一時許なれば摶飯を食ひつゝ、緒方氏に種々の異聞を聽く。今は大半は忘れたれど、さすがに記憶せるも一二あり。胴ダ坂といふ處、椎原と久連古との間にありて、何時の頃にや、球磨の相良家の勢、五家を侵したる時、其の勢の者共の胴腹を斬りたる處のよし。其坂の上には熊嫗(宛字)が墓といふあり。これは其の首領を葬りし處とかや、其の仝し勢の那須といふ處より打ち入りて、葉木を攻め落ちたるに 葉木人の陰れし處を葉木藪といひ、縱木人の遁げ入りし處を縱木藪といひ、小原のをば小原藪、其の他皆かくの如

く名けて、其藪々は今も存するよし。其相良の勢は勝に乘じて、椎原へも攻め入るべかりしを、糧米盡きて、澁柿を食ひし處を、那須柿といふとぞ。又聽きたる事は、織田氏の盛なる頃は、五家平家も、稍世の中廣く覺えて、甲佐の手前なる、八幡原といふ處まで出かけたりしに、信長討たれて後、復び舊巢に引き籠れりとなん。又我細川家へは五家より、年々鹿皮等を進物として、年頭の御祝儀として出熊ち、細川家よりは白銀壇などの、御贈與ある例ありしなど聞けり。

こゝにて五家人の十餘人、何れも板負うて下り行くに會ふ。此坂を下りて、向ひの麓を廻るば、柿迫の岩奥に出づ、聞きて嬉しく、ひた下りに下れば、果して農家數十戸あり。あれが岩奥なり、あの下に見ゆる往還を下らるれば、先きは迷ふべくもなし。いざさらば御別れ申さん、といはるゝに、これは御蔭で面白い道をしたり、と椎原にて包み置きし禮金を呈しつ、別れぬは正午ばかりありけむ。萊圃麥壠に戲るゝ無心の村童、浮世を外にして、馬牛を牽きて通る老翁など、田舍の春は何處も長閑きものなるが、昨日まで陰氣の山奥にありし故にや、此地の景氣はわけてのどけくぞ覺えし。後にて聞けば、柿迫は田舍にても珍しき風俗敦朴の處にて、僻地ながら教育を重ずる美習ありとかや。凡そ物内に在れば、外に發する習あり。されば人氣の美は、たのづから村景を麗くする理もあるべし。路傍の家に入りて息ふに、今日新築の祝ひありとゝにて、爺嫗嫁姑打あげて準備に忙しき樣なり。此家の向ひに、いと大なる古杉の株あり。其内のうつろなるゝ地藏尊を安置す。其下より水湧き出づ。極めて清し。

昨日馳走にありしエノハといふ魚を、家づとにせんと思ふに、白岩戸といふ處より下ゝはなし、と聞きて日未だ高きに其手前なる、土井といふ處の出小屋に一夜の宿をたれむ。こゝには酒をも販くに、

先きに佐々の越にて見し五家の者共、ぞろ〳〵と立替り入り替り來て、藪雀のごとくのゝじり合ひ、板賣りし代を酒にして飲みて去る。中に一人始めより飲み續けし男、我を捉へて先生、先づ座られよ、物語らんといふ、これも後學の爲めなり、と思ひ打ち語ふに、此男、醉に乘じて吐き出す言、腸のよるゝ程可笑し。聞けば此男、始めは數萬金を有ゑて、五家屈指の長者なりしが、花の熊本に出でゝ、双樹とゐふ魔窟に墮落し、黄金を散ずること破屐を棄つるが如く、今は板を負ふて、日毎〳〵賣りに通ふ身となりしよし、を得意顔に語りつ、おれの胸は胸が別だと誇る。可笑しきこと限なゑ。さて目的のエノハも、幸ひ二百目程手に入りたれば、夜にゐけてこれを炙り、十時頃蓐に就く。亭主戸外に出て、アー山が燒ける、あすは雨か、と獨語するを笑止と思ひて、夢に入りしが、夜半目覺めて聞けば、〻として急雨の音あり。早くも雨にありしかと思ひしが、よくきけば屋に近き溪水の涓々たるなり。

行く水に夢も流るゝ土井かな

四月五日　昨夜の亭主が豫報違はず、天氣濛々たり。朝飯を終り、五家布を一尺程買ひて、昨夜の魚を包み、宿料魚代布代〻拾五錢といふ、あきるゝ程やすき勘定を濟まゑ、八時頃此宿をたつ、白岩戸邊にて少々細雨至りしが傘を廣ぐる程もなく、やがてやむ。拂川、椿、長小野、小莚、萱野など打過ぎて、唯獨りポトリ〳〵と行きけるが、甲佐の手前より太雨降り來しかば、茶店に雨宿りし、晝飯したゝむ。暫し待てども雨脚益大にして、晴れ間もなし。そこを立ちて、甲佐も過ぎ、緑川の堤を下るに、煙雨の中を漕ぎ下る筏、笠蓑にて河中に釣する人なども、遠きは淡く、近きは濃く、凡て淡墨の畫を見るが如し。長堤も行き盡して、上嶋の渡を渡る程も、猶雨は霎時もやまず。剩へ足の胼胝破れ、草鞋も切れ、不快

云はん方をければ、二里許の道を殘して、中の瀬なる知人の許に宿を、明くれば四月六日　今日も曇天なれども雨は落ちず。九時許にこゝを立ちて、午前十一時ェノハと、足のマメ十許を土産にて　家にぞ着きにける。余の九人は豫期の如く、五木、四浦、人吉より八代よ廻り、これも此夕暮歸り付きたり。

（完）

古代計算法一斑

久芳準平

數とは、同じ種類の物の、集まれるより、起る觀念にして、物あれば必ず數あり。故に或一派の哲學者は、言を爲して曰く、凡て知らるゝものは、皆數を含めり。何となれば、數なくしては、何物をも考ふること能はず、又知る能はず。數なくては、總ての物不定不明なればなりと。凡そ、吾人の手よ觸るゝもの、目に見るもの、一として數の支配を、脫することを能ざるを見れば、吾人は此言の、眞理たるを認めざるを得ざるなり。是を以て、數と云ふ觀念は、人類の發生すると共に、個人の腦裏に湧出し來るべき、必然の結果なり。而して、個人集りて社會をなし、彼我の交通、漸く開くるに及んでは、有無相通じ、協同事に從ふを以て、物品交換のこと起り、損益分配のこと生じ、是非とも數を、取扱はざるを得ざる、時期に、際會すべし。計算の必要、是に於て起る。果して然らば、如何に蒙昧野蠻の、太古に溯るも、苟くも、社會をなせる人類の、棲息せる以上は、多少計算法の行はれしや、また疑を容れず。計算の第一着歩は、命數にあり。而して、數を命するには、先づ命數の原基（Scale of Notation）を一定せざるべからず。此原基は、これを五とおすも、七とおすも、また十二とおすも、固より任意にして、